

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	大塚 誠也
論文題目	平安後期文学の生成と同時代の享受——『更級日記』と後冷泉朝前後——
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、平安時代の後期、特に十一世紀後半の後冷泉朝前後という、仮名文学が盛んに生成され、また享受された時代を研究対象とする。藤原頼通を中心とした融和的な当時の貴族社会にあって、頼通とつながる后妃ならびに内親王たちの文藝圏で、少なからぬ女房たちにより家集、物語作品、日記作品などが次々と生成され、また歌合もしばしば催された。論文提出者は、こうした後冷泉朝期の文学に関する先行研究の成果をふまえつつ、個別の作品、作者、そして読者の特性をより詳細にみてゆくことにより、この時代の仮名文学を総体的にとらえることをめざした。その成果となる本論文は二部構成で、十の章（および序章と終章）からなる。以下、章ごとに論の要点と特質をまとめておく。</p> <p>「第一部 『更級日記』と孝標女の時代」では、平安後期の仮名日記として著名な『更級日記』と、その作者・菅原孝標女を研究対象とする。『更級日記』の先行研究は多いが、本論文では作者の人間関係に注目したり、孝標女作とされる『浜松中納言物語』などとの関わりを新たな視座からとらえなおしたりしつつ、「祐子内親王家の女房としての作者」という観点からも享受の問題にとりくんでいる。</p> <p>「第一章 「殿の中将」藤原長家と祐子内親王家」では、『更級日記』に点描される藤原長家に注目している。道長の子息・長家は孝標女が出仕していた祐子内親王家の別当であり、同家の関係者たちには重要な人物であるとともに、孝標女にとっては、少女時代に交流のあった行成女の婿でもあった。作者と読者が同じ文藝圏に属することと、日記の記事が選択されることとの関わりを具体的に検討した論である。「第二章 浮舟と「隠し据ゑ」——『浜松中納言物語』との相互性——」は、女君を「隠し据ゑ」という例が、『源氏物語』（浮舟）、ならびに孝標女作の『更級日記』『浜松中納言物語』の三作品に集中していることに注目し、孝標女の両作品が読者に対して互いを想起させあうようにつくられていることなどを論じている。つづく「第三章 長谷寺記事と菅原道真」は、『更級日記』の中で直接言及されることのない作者の父祖・道真との関わりを探究する論である。道真が長谷寺との関わりを有することから、『更級日記』内にみられる長谷寺関連記事において道真のことを間接的に記している可能性を論じている。「第四章 源資通と「天照御神」「冬の夜の月」」では、従来も注目されることの多かった源資通の登場する箇所において、物語的な世界と仏教に対する信仰とのゆるやか繋がりを見出し、物語への耽溺と神仏への帰依という二項対立的な把握にとどまる先行研究への批判を示している。さらに「第五章 女房日記の踏襲と逸脱——主家賛美の欠如をめぐる——」は、女房としての立場から主家を讃える記事を必ず織り込む『枕草子』『紫式部日記』、あるいは『栄華物語』などと比較し、『更級日記』では主家を賛美するという類の記事が徹底的に省かれている点に注目した論である。</p> <p>つづく「第二部 後冷泉朝前後の作者達と読者達」では、作者と読者がともに所属していた、后妃ならびに内親王たちの文藝圏を研究対象として、そこに仕えている女房たちと、作中の女房たちとの照応関係をとらえながら、後冷泉朝前後の仮名文学の生成と享受を総体として論じようとしている。</p> <p>まずは「第一章 「左右」の修辞法の展開——紫式部から後冷泉朝へ——」では、「左右」という語が複数の意味をもっていたばかりでなく、『源氏物語』にみえる特殊な用法があることに注目して、この「左右」という語からみえてくる各時代の各文藝圏の特徴などにも迫っている。つづく二つの章は『狭衣物語』に関する論で、「第二章 『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達——男君への応対を中心に——」では、作中で齋院となる源氏の宮が、『狭衣物語』作者・宣旨の主人にあたる六条齋院禊子内親王と重なる面があることを手がかりとして、『狭衣物語』における源氏の宮付の女房たちのあり方から禊子内親王家の女房たちの姿を透かし見るというような新たな議論を展開している。つづく「第三章 『狭衣</p>	

『物語』の「大弐三位」と大弐三位藤原賢子」においても、女房に着目する。すなわち、物語の結末部で帝となった男主人公の乳母「大弐の三位」が実在した大弐三位（藤原賢子）を想起させるようなしかけがあることを見出している。次の「第四章 『四条宮主殿集』における恋の歌群の遍在」では、後冷泉天皇の皇后寛子に仕えた女房・主殿の、きわめて精緻に編纂された家集を対象とし、仏教的な懺悔がテーマであるとみられがちであったこの家集で、前半だけでなく後半においても恋の要素が色濃いことを明確にしている。最後の「第五章 後冷泉朝における后妃文芸圏と内親王文芸圏の位相」では、后妃のところでは家集が、内親王のところでは物語・日記作品がそれぞれ多く生成されているという点に注目し、それぞれの土壌の特質を対比的にとらえている。

以上が、本論文の内容と特質である。本論文の学術的な価値は、概ね以下の二点にまとめられよう。

第一に、これまで和歌文学、日記文学、物語文学等々といったジャンルごとにわかれて研究が積み重ねられてきたのに対し、本論文提出者は、『更級日記』を中心に据えながらも、孝標女が物語作者でもあったらしいこと、さらには彼女が同時代の仮名文学を支えていた内親王の文芸圏に属していたことなどを契機として、各ジャンルを越境する議論を展開しえたことが評価に値する。

第二には、后妃と内親王の文芸圏が後冷泉朝前後の仮名文学の生成基盤として機能しながら、それらがまた享受の場でもあったという実状に留意し、文学の生成と同時代の享受との関わりをとらえることにより、『更級日記』をはじめとして、『浜松中納言物語』『狭衣物語』などに関する独自の見解を提示した点も挙げられよう。

一方、審査委員からは問題点、残された課題等々が次のように指摘された。

- ・第一部では、祐子内親王家から外部へのアピール、また作者からのアピールというようなことが『更級日記』に関わることとして論じられているが、やや具体性に欠ける推察ではないか。
- ・平安後期の文学研究として、十二世紀まで一気に対象を拡げるのはむずかしいとしても、堀河朝あたりまで射程を拡げてほしい。
- ・個別の作品・作者、あるいは個別の事象についての探究はなされているものの、時代のトータルなあり方については、いまだ充分とはいえない面がある。
- ・『四条宮主殿集』（第二部 第四章）などの家集については、個々の歌にしても、家集の編纂に関わる問題などにしても、論じられるべき点が少なからずのこされている。
- ・和歌を詠み、日記などを書き、さらにそれらを編纂するという営為には、自分の名を後世にのこそうとする意識があろう。そうした問題へと接続してゆくことも可能ではないか。

以上のように、より踏み込んだ論の展開が望まれるところは複数のこされている。とはいえ、本論文のように、和歌文学、日記文学、物語文学等々のジャンルを超えて、後冷泉朝前後の仮名文学に関する総合的ともいえる研究がまとめられたのは画期的なことであり、審査委員会としては、本論文を課程による博士学位論文にふさわしいものと判断した。

公開審査会開催日	2018年1月24日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	陣野 英則	平安時代文学・物語文学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	兼築 信行	和歌・文献学	
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院・教授	福家 俊幸	平安時代日記文学・物語文学	博士(早稲田大学)
審査委員				
審査委員				